



身長:170cm  
体重:53kg  
B:100(I)/W:60/H:87

特技:催眠術/媚薬調合/耳かき

主人公の呼び方:主<sup>あるじさま</sup>様

好きな食べ物:とんかつ/ラーメン/水まんじゅう

好きな体位:騎乗位/正常位/立ち<sup>バック</sup>後背位  
好きなプレイ:キス/淫語責め/前立腺責め

<sup>つばき</sup>椿と共に異世界の戦国時代で暗躍していた、  
武田忍軍のくのいち。

装束の布面積が小さいのは、身体の成長に合わせた装束が支給されず、幼少期より使っているものを無理矢理仕立てて使用しているため。

余りの強さから寝首をかがれることを恐れた長により、裏切者の汚名を着せられ、追い詰められた末に身投げし、現代日本に転生。主人公に助けられた恩に報いる形で主従関係を結ぶ。

奉仕好きである一方、微サドな面もあり、主人公に乳首責めや前立腺責め、寸止めなどをするこ<sup>も</sup>しばしば。

それでも主人公のことを大切に思っていることは間違いなく、本当に嫌がることは決して行わない。

おっとりとした見た目通り、主人公を甘やかせることが大好きで、何かと理由を付けて膝枕やハグ、果ては授乳手コキまでしようとする。

媚薬の調合や催眠術を得意としており、彼女の手にかかれば付き合っ<sup>て</sup>尚奥手な主人公も黙ってしまう。

性欲が果てしなく強い。

な ず な  
薺





つばき  
椿

身長:168cm

体重:50kg

B:94(G)/W:58/H:84

特技:裁縫/妄想/マッサージ

主人公の呼び方:<sup>との</sup>殿

好きな食べ物:オムライス/ビーフシチュー/ミルクレープ

好きな体位:対面座位/<sup>バック</sup>後背位/正常位

好きなプレイ:キス/フェラチオ/アナル舐め

<sup>なずな</sup>  
齊 同様、異世界の戦国時代で暗躍していた、  
武田忍軍のくのいち。

齊にとっては妹のような存在であり、彼女もまた、齊を姉のように慕っている。

転生後に命を救ってくれた主人公に強い恩義を感じ、齊と共に仕えることを決意。

一線を越えてからは、齊と共に三人でラブラブあまあまな生活を楽しむように。

威圧するような冷たい表情で誤解されがちだが、実はかなりの甘えん坊で、常に主人公の気配を探している。

自他ともに認める程の奉仕好きのマゾであり、イラマチオや種付けプレスなど少々アブノーマルなプレイを自らねだることも。

主人公限定の匂いフェチ。陰部や腋、足といった、匂いの強い場所が大好きで、主人公の匂いを嗅ぐとそれだけで性感が高まってしまう。

性感が高まると淫語を言うようになり、自身が発した淫語で興奮する。

性欲が途方もなく強い。

# 異世界くのいち淫恋譚

～最強くのいちの甘々ドスケベ佳活記録～



## 目次

序.くのいちと出会い	8P
弐.くのいちと初夜	40P
参.くのいちと回春マッサージ	114P
終.くのいちと紡ぐ日々	192P
あとがき	204P
おまけ	206P

SDイラスト:ユマニテ

**※ご注意※**

**この作品に登場するヒロインは、異世界の戦国時代から転生したという設定です。**

**そのため、台詞の中の外来語は全て“ひらがな”で表記されております。**

**例：オーラルケア→ “おーらるけあ”**

## 序・くのいちと出会い

——はい、もしもし？……ああ、何だ。母さんか。どうしたの急に。

ってか、家電じゃなくてこっちにかけてくれればよかったのに。

え？……ああ、ごめん。マナーにしてみた。うん。着信あったよ。ごめんね。

それで、どうしたの？

うん……うん……ぼちぼち。いやまあ、変わんないよ。ちゃんとやってるって。自炊してるから。大丈夫大丈夫。そっちはどうなの？……うん。大分慣れてきた感じだね。いや、そりゃ最初はびっくりしたよ。

『老後は二人で海外で暮らしたい』ってさ。急すぎるって言うか……。

いや、聞いてないから。そんな話。

治安とか大丈夫なの？ やっぱ海外って言うと、その辺が怖いんだよね。物騒って言うかさ。

……へえ、割と日本人も多いんだ。日本語だけで暮らしているの？ へえ……。

まあ落ち着いたら一回そっち行ってみるよ。パスポート？……あー、ちよつと……待って。

大事なのはわかってるけどさ、そんな行かないじゃん。海外って。

周りにはわかんないけど僕は行かないよ。出張もないし。父さんは？……ビリヤード？ そんなシブい趣味してたっけ？

向こうでハマったんだ……ははは、いいじゃん若々しくてさ。ハスラーって言うんでしょ、あんま詳しくないけど。うん、まあまた電話でもメールでもいいから。うん……じゃ、また——。

「……ふう」

溜息を一つ吐きながら、受話器を置く。

こっちにいた頃はこんなにお喋りじゃなかったんだけどなあ。

思いながら、振り返ると。

「い、いたんだ……いつの間に」

そこには、当たり前のように。

片膝を立てて。



僕がそちらを見ると同時に。

“彼女達”もまた、顔を上げて僕を見る。

「主<sup>あるじさま</sup>様。今お話をされていた御方は、母君様にございませうか？」

新雪を思わせる、真っ白な髪。

色素が抜けているだけでは、こうも美しく輝かないだろう。

紅<sup>ルビ</sup>玉を連想させる真っ赤な瞳は、柔らかに僕を映す。

髪の色にも負けない色白の肌。整った顔立ちはいつ見てもドキリとしてしまう。

動きやすいという理由から、超タイトな紅色の忍装束を着込んでいるのだが。

グラビアアイドル顔負けのボディラインがはっきり分かる格好は、目のやり場に困る。

若く張りのある生足に、程良く肉の乗ったヒップ。

特に胸——Iカップの爆乳は、僕の理性を甘く蕩かそうと囁きかける。

というかその装束……谷間が強調されすぎでは。

「う、うん……まあ……」

目を合わせることも出来ずドギマギとする僕の、その横で。

「殿<sup>と</sup>。驚かせてしまい、申し訳ありません」

麗しい紅色のロングヘアを後ろに束ねている。

所謂、ポニーテールのヘアスタイルだ。

ひんやりとした印象を持たせる、蒼<sup>サファイア</sup>玉色の瞳。ツンと尖った鋭い目つきだが、その奥で僕を見る眼差しは、とても優しい。

透明感のある肌は、汗の玉すらも弾く程の張りがあり、今まで見てきたどの女性よりも瑞々しい。

薄い唇は、言葉と共に僕を惑わせる。

こちらも随分とタイトな忍装束。露出した色白の太ももは、柔らかなながらも引き締まっており、男の理想を体現しているかのようだ。

スタイルも当然のように拔群。“相棒”には負けるものの、それでもGカップのバスト。堪らない。

つい、視線を脚や胸元に落としそうになりながらも、一

度ぎゅつと目を瞑り、息を吐きながら見開く。

「ああいや、その……いや、大丈夫だよ。うん」

どぎまぎとしながら返す。ついでにちよつと嘔んでしまった。恥ずかしい。

一つ屋根の下で、こんな美人二人と暮らしている。しかも二人して無防備で隙だらけで……。僕の理性もどこまで持つか、暮らし始めてまだひと月も経っていないが、早くも不安になってきている。ぶっちゃけ……性欲もヤバイ。

「……主様？」

「どうなされましたか、殿。何か、我らに不手際が……」  
じつと見つめられ、思わず目を背けてしまう。

「ほんと、何でもないから……ね？」

僕は二人に、この家の主と認められている。つまりはお殿様というわけだ。

くのいちである齊<sup>なすな</sup>さんと椿<sup>つばき</sup>さんとの出会いは、半月程前のことだった。

§§§

僕はとある山の、中腹部を切り開いて建てた家に、一人住んでいる。

何でも高級な別荘として使われる予定だったとのこと、広い庭にプラスして大人三人が余裕で漬かれる大きな浴場、土壇は優に超える和室と洋室が一式ずつ設えてあり、二階に上がると客室のような間取りの和室洋室がそれぞれ二部屋ずつ。何とも豪華だ。無駄に。

山の中にあるだけあって、空気や水は綺麗なのは結構だが、夏は暑くて冬は寒い。虫は勿論、蛇やハクビシンまで出てくるとんだ物件だ。

元々は両親と三人暮らしだったのが、父が定年退職したのをきっかけに、夫婦二人で海外に移住してしまった。

結果、馬鹿みたいに広い家に一人暮らし。

でっかい風呂も、シャワーで事足りる。

庭の草は伸び放題。植えられていた花も、すっかりしおれてしまった。

要するに、持て余していたのだ。

忙しい毎日、管理する余裕などない。

気が向いたときに掃除をして、適当に自炊をして、それなりに貯蓄をして。

矢継ぎ早に過ぎる時間は、寂しさを感じさせる暇も与えてはくれなかった。

そんな、ある夜のことだった。

春も目前に控えた、風が強い夜だ。

街灯もなければ人気も無い山中の一軒家。吹き荒れる風が、窓や戸を叩く。

(もうちょっとしたら寝るかあ……)

僕はバーチャルアイドルのゲーム生配信をぼんやりと眺めながら、ビールを飲んでいた。

明日は休みだ。買出しに行かないと。そんな事を考えながら。

「……ん？」

戸を叩く、風の音……ではない。

違和感を感じた。

リズムが、一定なのだ。

「……マジかよ」

ドン、ドンドン。ドン、ドンドン。

一度叩き、数秒置いて二度叩く。これの繰り返し。

……叩いている。誰かが、戸を。  
 こんな山奥に？ 誰が？ 何のために？  
 家主に用事があるならば、チャイムを使えばいいのでは

……？

泥棒なら、寝静まった頃を見計らえばいい。ならば……  
 強盗か？ いや、しかし戸を叩くなど、互いにリスクが高  
 すぎる。

ドン、ドンドン。ドン、ドンドン。

戸を叩く音は続く。

「やっべ……」

ほのかな酔いも、一瞬で吹き飛んだ。

警察を呼ぶことも考えたが、ここは山奥で、しかも真夜  
 中。何かトラブルに見舞われたのかもしれない。

ひとまず、様子を見よう。

音を立てずに玄関まで向かう。

「っ!!」

すりガラスの向こうで、はつきりと見えた。

人影。それも……二人。

「……何ですか」

僕は唸るような声で聴いた。

和えて声を低くし、見えぬ相手に自分が警戒しているこ  
 とを伝えようとした。

「み……道、に……まよ、つて……どう、か」

聞こえたのは、女性の声だった。

「道に……？」

まだ開けない。いくら女性でも、二人掛かりで襲われた  
 らひとたまりもない。

膠着状態の中、扉の向こうの相手が、か細い声で言った。

「一晚……だけ、でも……宿……を……」

そこで声が途切れ、扉の向こうの影が崩れ落ちた。

「ちよっ、ちよっと!」

慌てて引き戸を開ける。

——そこには。

「……へ？」

二人の女性が、互いを庇い合うようにして倒れていた。  
 驚いたのは、その格好だ。

「……何これ、忍者？ くのいち……？」

忍装束、というものだろうか。

一人は紅色の装束を身に纏い、もう一人は白色のそれだ。  
脚絆きゃはんや手甲も同じ色合いでまとめている。

やけに布面積が小さいことを除けば、本格的なコスプレだ。いや、今のコスプレはこのレベルなのかもしれないが、目立ちそうな色合いであることを無視すれば、二人の恰好は誰が見ても忍者だと答えるだろう。

「外人さん……？」

赤い忍装束を着た女性は、背中まで伸びる新雪の如き真っ白なロングヘア。

一方、白い装束を着た女性は、燃えるような紅い髪をポニーテールに結わえている。

ウィッグ……って感じでもなさそうだ。

コスプレイベントの帰り道で迷った外人さん……といったところだろうか。

「いや、でも日本語だったよな、さっきの」

宿を貸してくれ。あの言葉は確かに流暢な日本語だった。

片言でもなかったし。

色んな考えが浮かんでは消える。

「と、とにかく家に……」

下手な考え何とやらだ。

さて、介抱すべく近くに寄ると……二人とも、信じられないくらい美人だ。

そして二人して、気を失っている。

艶めかしい太もも。魅惑的な谷間。

もしかして……今なら……？

「いや、ダメでしょ……ダメだって！」

自身を律し、悪魔の囁きを振り払い。

まずは白い髪の女性から。

「う……う……っ」

微かに洩れる吐息。甘い匂い。柔らかな感触。

「つく……っ！」

何とか自分を抑え、リビングへ。

三月とは言え、夜中は零度を下回ることも珍しくない。

二人とも、体が冷え切っている。急がないと……。

もう一人も同様に、手早く中へ。

ちゃぶ台を退け、両親が使っていた布団を拝借。

同時に、ガスストーブとエアコンの電源を入れる。

これで大分マシになるはずだ。

「さて……」

どうしたものか。

彼女達の素性は、聞かないといけない。

——にしても。

「……んう……すう……」

「……くう……くう……」

二人ともぐっすり眠っている。余程疲れていたのだろう。

顔色は悪くなさそうだし、呼吸も安定している。

後は、目が覚めるのを待つだけだ。

ふと時計を見る。

「夜の一時か……」

もう寝ようと思っていた頃だったし、仕方ないか。

静かに寝息を立てている二人を見ると、安堵からか、睡魔が襲ってきた。

電灯を暗くし、まどろむ。

色々驚かされたが、ともあれ朝にならなければ、何もわからないだろう。

僕は座り込んだそのままに、夢の世界へと堕ちていった。

\$\$\$

朝も早く、陽が昇り始めた頃。

「ん……………」

衣擦れの音と、柔らかな声が、僕の目覚ましとなった。

「……………」

紅い忍装束の女性が半身を起こし、ゆっくりと周りを見渡している。

困惑と混乱が、彼女の表情からありありと見て取れた。

「……大丈夫？ その……」

言うと、目が合った。

女性は驚いたような顔をするも、すぐに持ち直し、少し考えるような素振りを見せてから、口を開いた。

「……………ここ、は……？」

「えっと、僕の家。夜中に泊めてくださって言ってたよね。覚えてる？」

出来る限り明るく答える。社会生活で培った営業スマイルだ。

「あなた様が、私達を……」

「え、うん……まあ。あれからずっと眠ってたしね」

何だか、妙に古い言葉遣いだ。

僕が彼女の言葉遣いに訝しげにしていると、向こうは大仰に頭を垂れた。

「——誠、ありがとうございます。あなた様は私達の恩人です。宿どころか、このような上等な寝所までご用意頂いて……」

「えっと……あの……？」

ごっこ遊びや演技……ではない。表情は真剣そのものだ。

「このご恩は一生——」

そこまで言った、瞬間。

「何者ッ!？」

白色の装束を着た紅髪ポニテの女性が飛び起き、姿勢を低く構えた。

「ひいッ!？」

しなやかな動きは、虎やライオンを思わせる。僕は驚き、壁に背中を預けてしまう。

強い殺気に、縮み上がる。

“猛虎”は僕の喉笛に喰らい付かんと布団を蹴飛ばす。

だが、その爪が突きたてられる刹那。

「控えよ、椿ッ!!」

先程まで口調が柔らかかった雪色髪のくのいちが、打って変わって声を荒げて一喝する。

「このお方をどなたと心得る。我らを匿い、寝所をもお貸しくださった命の恩人……礼を尽くすことすれ、狼藉を働くとは言語道断ッ!」

その言葉に、虎は闘気を収め、僕と彼女とを見る。

「え……? あ……ああ……っ」

そして状況を理解したのか、顔から血の気が引いていく。

「もっ、申し訳ございませぬ! 知らぬこととは言え、とんだご無礼を!」

そして、平謝りに謝る。叱られた子犬のように、震えながら、身を小さく固めて。

「……此度の無礼、どうか私の首でお納めくだされ」

「な、薺……いえッ! どうか私の命で……!」

当たり前のように言う二人に、僕はやっと言葉を返した。「と、とりあえず落ち着いて。別に気にしていないから。」

死なないで、ね?

漏らさなくてよかったと、心底そう思った。

「許して頂けるのですか……?」

「う、う……うん。まあ、大丈夫」

許すも何も、後処理含めて死なれちゃ困る。

「……………」

僕からの「許し」を得た二人は崩していた座を正し、黙ってこちらを見ている。

「……………」

何かを考えているようでありながら、何かを言いあぐねているようにも見えた。

「……………」

「……………」

「……その、あ……そうだ、えっと……朝御飯とか……どう?」

長く続く沈黙が怖くなり、咄嗟に思いついた言葉を吐き出した。

「どう……と仰いますと」

白色の装束の忍——椿さんが聞いた。

「えっと、ほら、朝だし、ご飯とか食べないかな……って」



「……腹は多少減ってはおりますが、これ以上の施しを受けるわけにはいきませぬ」

紅色装束の忍、薺さんが答える。

施し……って程じゃないと思うけれど。今時そんなことを言う人はいないだろう。

だが、やっぱり本気だ。二組の布団が一生の御恩になっているくらいだし。

「うーん……」

だったら、言い方を変えよう。

「いやあ、ご飯が余っちゃってさ。食べてくれると嬉しいな……って。勿論、毒とか入ってるわけじゃないしさ、ね？」

突然のこととは言え、これまでの人生で見たこともないような美人が、二人も押しかけてきたんだ。

僕のちよつとした邪な気持ちだが、彼女達を帰すまいと囁きかける。

「……そう、仰るのならば」

「頂戴いたしまする」

部屋の隅に退けていたちゃぶ台を用意し、そこに座るよう促す。

「楽にしてくれていいよ」

とは言ったが、姿勢は全く崩さない。

まあ、胡坐でもかこうものなら見えちゃうし……ね。そこは仕方ない。

「ちよつと待っててね」

熱したフライパンにベーコンと卵を投入。お手軽ベーコンエッグだ。

白身が固まった頃合を見計らい、茶碗に温め直したご飯をよそう。

冷蔵庫に残ってた漬物を出せば、あつという間に朝御飯の出来上がりだ。

「つと、こんなんでもいいかな？」

パバツと作った朝食だが、三人分となると幾らか豪勢に見える。

用意された簡素なモーニングに、忍者達は目を見開いた。

「な……っ」

「あ……あ……っ!？」

揃って目が泳いでいる。

「あの……何か？ あつ、醤油欲しかった？ あとお茶も用意しなきゃだね、ごめん」

配慮が足りなかったか。立ち上がろうとすると。

「こ、このような……食事を……我らに……!?」

「う、うん。そうだけど……」

何か、まずかったかな。

もしかして、パンの方が良かったとか。忍だしご飯の方がいいと思っただけど。

でも外人さんだったらご飯よりはパンなのか……?

ぐるぐると考えを巡らせていたのだが、彼女達が次に放った言葉は、僕の予想を斜め上に突っ切った。

「白米……本物だ……」

「そ、その上……鶏卵に畜肉とは……あ、あなた様は……もしやこの一帯の領主様でございましたか!」

………はい?

「いやいやいや、そんなことないって。普通だよ普通。ほら、お茶淹れておくから、冷めないうちに食べよう!」

毒の確認か、スン、と匂いを嗅いだ後。

「——で、では。頂きます」

食べ始める。

一心不乱に。しかし行儀良く、綺麗な箸使いで。食器もまるで音がしない。

そして早い。卵が半分とベーコン一齧りで、ご飯がなくなった。

「おかわりあるけど……」

夢中で食べ進める二人に圧倒されつつ、お伺いを立てる。

「え——」

「何と——」

固まる。何だか生まれて初めてまともなご飯を食べた人みたいな反応だ。

「本心を聞きたいな。まだ食べたい?」

言うのと、二人はしばしの後、深く頷いた。

「恐れ入ります……」

「こんな食事、生まれて、初めて……っ」

それからも彼女達はひたすらに食べ進め、ついには炊飯器が空になり、冷凍庫でストックしていたご飯も温め直して振る舞った。

「ご馳走様でした」

一粒の米も残さず食べ終え、静かに手を合わせる。

「満足出来たかな?」

僕が聞くと、薺さんが少し恥ずかしそうに答えた。

「はい。本当に……重ね重ね……」

「まさか三杯ずつ食べるとは思わなかったけれどね。いや、これで米が綺麗になくなったし、助かったよ」

一方の椿さんは、まだ信じられないという顔をしていた。

「……あなた様は、何故我らにこのような施しを？」

「いや、だから施しじゃないってば。……というか、君達

一体何者なの？」

同じ言葉話すものの、何かちぐはぐだ。

齒車がかみ合わないというか、まるで彼女達二人だけがどこか違う世界から放り出されたかのような。

「……いいでしょう。一宿と食の御恩もあります。話せることはお話ししましょう」

「薺……」

雪色髪の忍、薺さんが表情を少しだけ陰しくし、僕に語りかけた。

「我らは武田忍軍、その末端……下忍にございます」

武田？

武田と聞いて僕が思い浮かぶのは、あの戦国武将た一人しかない。

上杉謙信と戦った、風林火山の人。

「武田って……あの、武田信玄の？」

「信玄公を知っておられるのですか!？」

椿さんが叫んだ。身を乗り出し、巨乳を目の前に突き出しながら。

「い、いやまあ、武田って言われたら武田信玄か勝頼くらいしか知らないけど……」

「では、この一帯も武田の領地ということでございますか？」

——は？

多分僕は今、凄いわな顔をしたと思う。彼女は一体何を言っているんだ？

「いや……違うでしょ。武田信玄って歴史上の人物だし」

「歴史……いえ、信玄公は確かに亡くなられておりますが、今は勝頼様のご子息、二十二代目武田家頭主武田春頼様が甲斐から信濃、そして尾張にかけて統治しております」

全然理解出来ない。どういうことだ？

「え……つと、じゃあ、君達は武田の忍で……でも、なんで二人つきりでこんな山にまで？」

そもそも、武田春頼って誰だ？

確か、武田勝頼の代で武田家は滅んだはずだ。

「……これ以上は、聞かぬ方がよろしいかと」

齊さんが少し表情を強張らせた。

「え——なんで……」

僕の表情を察してか、椿さんが神妙な面持ちで繋げる。

「……無用な詮索は、御命に関わりまする」

齊さんが、小さく息を吐いた。

「我らは追手から逃れている身にございます。この場所を知られば、あなた様の命も危うくなりましょう」

「そ、んな……？」

何だろう。裏社会とか、裏組織とか……そう言う類か？にしても、こんな目立つ格好でウロつく組織の人間はいないだろうし。

そもそもこの状況で追手がどうかとかどうか、ドラマの見過ぎだって話だろう。

かといって、彼女らの表情や語り口からも、やつぱり嘘とも思えない。

「今は気配を感じませぬが、いずれは……」

「我らはあなた様の邪魔にならぬよう、すぐにでも立つつもりでございます」

その言葉に、思索する。

「どこか、当てがあるの？」

「いえ……ここがどこかも分かりませぬ故」

思い切って答えてみる。彼女達の疑問の、その根源を。

「ここは日本だよ。現代日本」

「……にほん？」

二人して首をかしげる。

「その……もしかしてだけど。武田忍軍って言ったよね。ってことは、織田信長や豊臣秀吉とかは知ってる？」

とりあえず自分でも分かる戦国時代の武将の名を羅列してみた。彼女達がこれらのワードで何と反応するか、テストしてみよう。

「織田信長殿は設楽原しんらがはらの戦に破れ、自刃いたしました。豊臣？という方は存じませぬ」

——なるほど、ね。

たしか、長篠の戦だったか。

今「僕が生きているこの世界」では、織田信長が武田を倒し、ここで武田家は滅亡している。

だが、「彼女達の世界」では織田信長が敗れ、武田家が天下統一を果たしているようだ。

パラレルワールド……と言ったところか。

つまり、あくまで仮説なのだが……彼女達は、異世界からこの世界に放り出されたのではないか。

だとしたら……。

「ちょっとだけ、時間をくれないかな。多分……だけど、君達は違う世界からここに飛ばされたかもしれない」

その言葉に、二人は妙に納得したような表情で頷いた。

「あなたが仰ることの真意は分かりかねます。しかし、記憶を辿れば——」

薺さんが神妙に頷く。

「その追っ手っていうのは、多分もう追いかけれられないんじゃないかな。君達が違う世界に来たわけだし」

「……」

考え込む椿さん。何か、思い出そうとしている。

「この“にほん”なる国は、我がが育った甲斐国とは異なる文化が浸透している、ということでございますか」

「もっと言うと、未来だね」

「……未来？ 我らの国よりも、もっと先の……？」

顔を顰めて考え込んでしまう。まあ、無理もない。

僕は引き出しからコピー用紙とペンを用意し、まずは左

端に丸を描いた。

「この円が、君達の居た甲斐国とするね。そして……」

矢印を引っ張り、別の円を描く。

「君達は何らかの力で、僕の世界に来ちゃったってこと。丁度、四百年以上先の日本にね」

「……つまり、我らは時を越えて、この国へ着た、ということにございますか」

理解してもらえたようだ。しかし、また次の疑問が生ま

れる。

「一体、何故……」

そう。何故彼女達は異世界からここに飛ばされたのだろう。

どういった力が、働いたのだろう。

「それはさすがに分らないなあ。何か、思い浮かぶことはない？ 例えばだけど、追っ手から逃げてる最中に何か見たとか」

「………あつ」

ふと、薺さんが顔を上げる。

何かを思い出したようだ。

「よもやこれまでと思い、二人で崖に身を投じました。高

「高い崖から、海に叩きつけられるその寸前——」

「灯りが、我らを照らしました。太陽の如き眩しさに、目を瞑りました」

椿さんが繋げる。

「そして……気が付いたら、黒く硬い道に横たわっていました。夜でした」

アスファルトで舗装された山道、か。

「疲労感で身体が重く、寒さもありましたが……それでも追っ手から逃げなければと、目覚めぬ椿を抱えながら……」

あの急勾配を、徒歩で。相当な負担だっただろう。

息も絶え絶えだったのも頷ける。

「しかし、それなら……我々は、一体どうすれば……」

不安げな椿さん。論ず薺さんも、同じ顔をしていた。

右も左も分からない世界に、何の前情報もなしに飛ばされたのだ。無理もない。

「元の世界に帰ったら、また、命を狙われる……んだよね」

「恐らくは、我らを血眼で捜しているでしょう」

少し、考えた。

そして、提案する。

「例えば、だけど」

それが、彼女達のためなら。

袖振り合うも他生の縁、ではないけれど。

僕達が出会ったのも、何かの運命かもしれない。

「例えば、その追っ手が来たら、戦える？」

「数にもよりますが、二十人程度ならば、我ら二人で始末出来るかと」

真っ直ぐな目。頼もしい。

「なら、君達さえ良かったら……僕の家来にならない？」

家来……？ 静かに口にする、薺さん。

「僕も仕事で家を空ける時が多くてさ。その間、この家を護って欲しいんだ。その……お金はそんな払えないけど、

お小遣いくらいなら……」

「いえ、きんず金子など必要ありません。しかし……よろしいの……ですか？」

「この世界の理ことわりや取り決めなど何も知らぬ、言わば——獣のようなものですよ？」

このまま放っては置けない。……下心も正直。美人二人との同居、だからね。

それが、僕の思いだった。

「二人がよければ……だけどね」

薺さんと椿さんは顔を見合わせ、少しの後。

片膝を立て、僕に跪いた。

「——相分かりました。この薺、椿と共に、あなた様にお仕えいたします」

「我らの命は今日より、あなた様のもの。如何様にもお使いくださいませ」

言葉の端々が物騒なのは、変わらないけれど。

「と、とにかく。そういうことで、よろしくね」

二人の従者は、僕に深々と頭を下げた。

しかし、同じ日本とは言え、違う時代の人と、どう接すればいいのだろう。

僕のお婆ちゃんやお爺ちゃん世代とも……違うだろうし。

「あの……主様」

声をかけあげてみると、薺さんがおずおずと僕に声をかけた。

「恐れ入りますが、あなた様をただ今より……“主様”とお呼びいたしとございます」

「へ……？」

あるじ……さま？

「かねてより、主君に仕える日が来れば、このようにお呼びしたいと……ずっと、胸の内に秘めておりました故……」

主様……主様。か

「う、うん……じゃあそれで」

言うのと、薺さん凄じ嬉しそう。

「はい。よろしくお願いいたします、主様」

三つ指を突き、土下座をするように平伏する薺さんの横で。

椿さんも、正座のまま右手を挙げる。

「わ、私は……あなた様を、と……“殿”とお呼びたい……です……」

「と、殿……!？」

殿……。

「え——なりません、でしょうか。私も……その、薺と同じく……主君には、そう……お呼びしたく」

まあ、バカにする意図は全くないから……いいのかな。

「わかったよ、椿さん。それで……よろしくね」

「っ!……はい! よろしくお願いいたしますっ!」

わかりやすい位に表情が明るくなった。

……可愛い。

落ち着いたところで、薺さんが僕に尋ねた。

「主様。我々は、一体何をすれば良いのでしょうか」

そりゃそうだ。そう言う質問が飛んでくる。

「この身を賭して殿の御身をお守りすることは勿論出来ませんが、それだけではただの無駄飯喰らいの穀潰し。愛でられる分、狗の方がましと言うもの」

そこまで卑下しなくても。

「えっとそれじゃあ……ふ、二人はそれまで何をしていたの？」

過去をあれこれ掘り返すような真似は、正直気が引ける。

物騒な言葉も飛びそうで、あんまり聞きたくないけど。

それでも、二人が何をしていたかは知る必要がある。

「先も申した通り、武田忍軍の下忍でございました。我らはその中でも、体術に抜きん出ておりました」

——体術？

表情で疑問符を飛ばしていたところ、椿さんが続けた。

「……そうですね。しばし」

ガラス戸の外を見やる。

彼女の視線の先には、大木が。

虫食いだらけで半分枯れかかっている、どうしようもな

い厄介者だ。

「……痛っ」

「椿!？」

外に出ようとしたところ、軽く頭をぶつけてしまった。

そうか、あの時代にはガラスの存在もなかったんだった。

「ごめんごめん、今開けるね」

「これは、失礼を」

戸を開けると、椿さんは音もなく庭に足を着けて。

「ふう……あの上の柵程度ならば」

言うのと。

「へっ!？」

助走も無しに、跳躍。

刹那、木を蹴り、くるくると回転しながら二階ベランダへと飛びついた。

「は——?」

まるで映画の世界だ。一瞬過ぎてワケが分からない。

再び回転しながら落下。見事に着地した。

「これが体術にございます。最も、下忍でもこれが出来るのは……私と薺位でした」

恥ずかしそうに言う椿さん。



「次は私の番ですね」

彼女の活躍に火がついたのか、薺さんが隣で呟いた。

「——ふむ。主様のお屋敷は、これといったカラクリはないようですね」

太平の世に、カラクリ屋敷は必要ない。床暖房は欲しいけど。

「ほっ」

小さな掛け声と共に。

「はい？……いや、ちょ……っ!？」

壁に、張り付いていた。

凹凸など殆どない壁に、だ。

まさに、忍。

あんぐり口を開けてる僕に、薺さんはちよっぴり得意げになっていた。

「このように……天井にも——」

さながら蜘蛛の如く。

壁を伝い、天井を這う紅の忍者。

勿論凄い。凄いのだが。

それ以上に。

「いや、あの……み、み……」

「み？」

見えてる。装束の間から。

秘部を隠す真っ白のふんどしと……それに負けないくらい白く艶やかなヒップが。

「——あっ！」

視線に気付き、慌てて飛び降りる。

その際も、少しの物音も立てずに。大したものだ。

「……いえ、結構。主と認めた以上、すべてを見せる覚悟は出ています」

と言う割には、顔が真っ赤だ。

椿さんも、隣で少し頬を赤くしている。

「いや、その……うん、よくわかったよ」

自分でも何を言っているやら。

「そして……我々にはもう一つ、我らだけが持つ秘技がございます」

気を取り直した薺さんが、表情を戻して僕に言った。

「秘技？」

聞くと、二人は頷いた。

「例えば……」

言うのと、先程椿さんがぶつかったガラス窓に触れる。

「これは、*“がらす”*という材質の板でしょうか」

何だ？ 何でガラスのことを……？

「これが、我らが人としてさえ扱われなかった秘技にございます」

驚いていると、椿さんが悲しそうに零した。

「私達は捨て子でした。親の顔も分からぬまま、今までを過ごして参りました」

「……この髪や目の色から、忌み嫌われてもおりました」

今じゃ髪を染めてカラコンを入れている人も多いが、昔ならばそう言う扱いを受けていても不思議ではない。

「そしてこの力。見たもの、触れたものが何か、その記憶を辿る術を、我らは持っていました」

「あらゆる動きが、あらゆるカラクリが、あらゆる術が、全て手に取るように分かりました」

人の動きを完全にコピー出来る、見たもの触れたもの全ての情報が分かる能力……か。

「長を初めとする上忍は、我々を恐れました。いずれは、寝首をかかれるのでは……と」

そして……。薺さんの声は、震えていた。

怒りか、悲しみか。僕には、わからない。

「長は元々上様の命で我らを育て上げてくださいました。忍術も何も教えず、閉じ込めるようにして。決して、本意ではなかったのでしょうか」

「この装束も、春頼様より賜ったものでございます。私達は長や春頼様からの御恩に報いるため、二人だけで鍛錬を重ねました。……それが、良くなかったのでしょうか」

武田のお殿様の命令で洪々二人を育てていた。その過程で、彼女たちの力に気付いてしまった。

このままでは自分の地位が、命が危ない。そう思ったのかもしれない。

「ある夜、長は我らを呼びました。それまで見たこともない料理を、振舞いました」

「普段は下忍の残飯……それすらもない日々が続いた中で。無論、その料理には毒が入っていました」

毒……。思わず口に出してしまう。

「我々は残さず平らげました。既に、彼らの毒を体内で中和する程度の術は持ち合わせていました故」

「驚いた長は、しかしすぐに冷静さを取り戻しました。上忍を含めて、我らを緋鯉を追いつめるよう囲い、捕らえようとしたのです。我らを敵方に寝返った間者であると吹聴

しながら」

間者。今でいうところのスパイってところか。

椿さんと薺さんが、紡ぎ合わせるように言葉を繋いでいく。

悔しさが悲しさか、ぎゅっと拳を握りながら。

「我々は逃げました。殺すことも——出来ましたが。それまでの恩義が、ありました」

矢が飛び、礫が舞い、さすがの二人も疲弊し、追い詰められ……。

海に身を投げた瞬間……ということか。

「そして、今に至ります」

僕は彼女たちの優しさを、改めて思い知った。

どんなに傷つけられても、自分の信念を曲げない強さを知った。

「殿。同情は要りませぬ」

僕を見て、椿さんが言った。

「我らは鬼……影では髪の色から、白鬼や赤鬼と呼ばれていました。彼らからすれば、人ですらないのです」

「そんな私達にここまでの施しをしてくださる主様に、これ以上の言葉はありません」

「鬼だなんて……そんなこと思わないよ」

確かに、さっきの体術には面食らった。

薺さんは、芯が強いけれどちょっと天然で。

椿さんは、最初こそ滅茶苦茶怖かったけど、人柄は優しくとても朗らかで。

そんな二人を超絶美人だと思いこそすれ、鬼だなんて考えたこともなかった。

「鬼なんかじゃないよ。少なくとも僕はそう思う。二人は僕と同じ……いや、僕なんかよりもうんと優れた人だよ」

鬼と呼ばれるべきは、その長だろう。

「……………」

「……………」

なんて、啖呵を切ってみたんだが、ノーコメント。

というより、きょとんとしている。

まずい、滑ったかな。と思っていたのだが。

「人……？ 我々が、にございますか？」

「……私、達が……人……」

呼び慣れていなかったからだろうか。困惑さえ感じられる。

「人だよ。間違いない。断言するよ」

言い切った。その気持ちに付度や偽りなどないのだから、勿論後ろめたさもない。

「だから、顔を上げて」

薺さんも椿さんも、涙を堪えていた。

「……主様……かような、お言葉を……」

「忍たれども……つい、感情が露に……どうか、お許しください……」

小さく鼻を吸りながら、一生懸命に涙を引っ込めようとする二人に、僕が恐縮してしまう。

「ご、ごめん……」

「いえ……っ……もう、大丈夫です」

「お見苦しいところを、お見せいたしました。申し訳ございませんね」

大丈夫、そうかな。

「それじゃ、色々見て回ろう。ついてきて」

気を取り直して、家の中の案内を再開。

「掃除機……これは、雷の力で屋内の塵芥を吸い取る機械、なのですね」

コードレス掃除機も、彼女らからすれば未知の文明。

「冷蔵庫……？ 成程、食料専用の貯蔵庫なのですね。長

い戦には保存食が欠かせませぬ故、この世界にもこのような倉庫があるのですか。この冷蔵庫が戦場にあれば、軍の士気も上がることでしょう」

うん、食料の保存という用途以外は全然違います。

「あの……開けてもよろしいでしょうか。——っ！ すごく……畜肉と、鶏卵が沢山……それとこれは……そ、ーせーじ？」

はて……？ 肉のようですが……？ 何とか読み取った文章。どれもこれも、好奇心をくすぐるものばかりだ。

「ソーセージはまた今度食べようか」

「っ！ はい！」

今度は椿さんが申し訳なさそうに、チルドの餃子を指差しながら零す。

「あ、あの……こちらの、〃ぎょうぎ〃なる食べ物も……」

「じゃあそれも、ね」

こと、食に関しては二人ともすごい関心を持っている様子だ。

少し事情を聞いた限りでも、とても辛い境遇にあっただろうし……ここに居てくれる間は、ご飯には困らないようにしてあげなきゃ。

「これは洗濯機。服を洗う機械で、二人の服も……これから買って行けばいいか」

「ふむ……この、洗剤という……白色の粉を使うのですね」「ほう、衣服の種類によって洗い方を変えねばならぬのですね。作法を違わぬようにしなければ……」

洗濯機、乾燥機、風呂、テレビ、電話。

あらゆるものを説明して回る。

戦国時代には考えられないテクノロジに驚きながらも、恐ろしい程の速さで順応していく二人のくのいち。

触れただけで特性や使い方がわかる、というあの能力もあつての事だろうが。

「大方使い方は分かりました。主様のご説明のおかげです」掃除機を片手に、薺さんが言った。

忍装束に掃除機。なかなか異様な組み合わせだ。

「まずは手始めに、殿のこの屋敷をお掃除いたしましょう。頂いた御恩を、少しでもお返しせねばなりません」

片や、雑巾とバケツを持った椿さん。

こちら、日常と非日常が相席している。

「うん……」

屋敷……は流石に言い過ぎだと思うけど。

「主様はお休みくださいませ。その間に、掃除の程をさせて頂きます」

確かに、ここ最近掃除はしていない。汚れや埃も多いが……大丈夫だろうか。

ただ、二人はやる気満々だ。そこに水を差すのは無粋というものだろう。

「じゃ、じゃあ……僕は上で休んでるね。何かあったら教えてね」

「御意」

「お休みなさいませ。殿」

昨晩は遅くまで起きていた。言われてみれば、多少なりとも眠気が。

仮眠を取るつもりで、僕は自室へと向かった。

\$\$\$

「……の……殿……」

ぽんぽんと、肩を軽く叩かれる。

ふと横を見ると、二人が正座して待機していた。

「お休みのところを失礼いたします。この部屋を除き、掃除が完了いたしました」

時計を見る。もう夕方に近い。

半日は続けて掃除をしていたのか……。

よくよく見ると、まだまだ寒さが残る時期にも関わらず、二人とも汗をかいている。頑張りすぎだ。

「初めての掃除故、不安もございます。一つ一つ、主様に見て頂きたく。さ、主様。お手を」

齊さんに手を引かれ、立ち上がる。

二人とも、心なしか嬉しそうだ。

「まずは『りびんぐ』から。こちらは、掃除機をかけた後、雑巾をかけ、仕上げに『すちーむ』を当てました。窓も曇ってありました故、洗剤で掃除をさせて頂きましたが……外敵から見えぬようにするには、余計でしたでしょうか」

言葉を失う。まるで新築だ。

二人掛りでやっていたとは言え、ここまで綺麗に出来るのか。最早プロだ。プロの仕事だ。

フローリングは光を反射し、自分達の足元まで映っている。

窓も一枚一枚が取り替えたかのようにピカピカだ。

「凄い……」

としか、言えなかった。

その反応に、くのいち達は少し頬を緩ませる。

「殿、お次は『きっちん』です。こちらは油污れが多くありましたので、洗剤と『すぽんじ』をお借りいたしました」

「勝手ながら、お皿や箸なども洗わせて頂きました」

——新築かな？

コンロにこびり付いた油污れはしっかりと落とされ、シンクの水垢も落とされているばかりか、鏡面仕上げになっている。

乱雑に重ねてあった食器は大きさや用途ごとに分けられ、整理されている。勿論、全てが綺麗に洗われた状態で。

「続いては厠……<sup>かわや</sup>こちらでは、『といれ』と呼ぶそうですね」

彼女達には慣れないであろう洋式便座だが、既に使い方

も把握しているようだ。

「大変ご無礼ですが……ここだけは、我らにも使わせて頂きたく存じます」

「いや、ここだけじゃなくて、全部使っていいから」  
生まれて初めてだ。同居人に『トイレは使わせて欲しい』と懇願されたのは。

「他……も……？」

齊さんが不思議そうな顔をする。

「そ、そりゃ勿論……お風呂とか、トイレとか……あ、そうだ！ 部屋も決めよう！」

折角住み込みでの家来になるのなら、プライベート空間は確保しておいたほうがいい。何より自分の理性のために。

こんな美女が四六時中傍に居たら、何かとヤバイ。

「部屋……でございますか」

「我らにそのような施しなど……雨風さえ凌げれば、それ以上の幸せはありません」

「いや、それじゃこっちが困るというか……ともかく、部屋を決める！ これは僕の命令、分かった？」

「そうだ、僕はお殿様なんだ。多少の我慢……というか、お願い位は聞いてもらわないと。」

「……そうまで、仰るならば」

幸い、部屋は有り余っている。

両親は現在、海外暮らしを絶賛満喫中。帰国はまずない。それに元々大きな家だから、持て余していたのだ。

ならば、有効活用するべきだろう。

「和室がいい？ 洋室がいい？ 布団もちゃんとあるから、そこは二人で相談して決めてね。勿論これも、命令だからね」

若干申し訳ない気持ちもあるが、命令……というのは割と心地がいいな。

しからば……と、二人はそこまで考えることもなく、答えた。

「和室を」

「洋室を」

こうして決まった二人の部屋。

齊さんが希望したのは、和室だ。

畳は古く所々ささくれ立っているが、それでも嬉しそうに座した。

「今、布団持ってくるからね」

彼女達が氣を失っていたときに使った布団を、そのまま持ってくる。母さん、布団をしばらく借ります。

今のところ布団以外には何もない部屋だが、後々買ひ足していけばいいだろう。

「主様。本当に……よろしいのですか……？」

「え、何が……？」

聞くと、申し訳なさそうに返す。

「私達はこれまで、納屋の奥が寢床でした。こんな上等な部屋をお貸し頂けるなど、罰当たりでございます」

「いや、これが普通だつてば……。電氣の使い方は分かるかな。あと、暑かったり寒かったりしたらエアコンを使えばいいからね」

ここは冬寒く、夏暑い場所だ。身体を壊されたら大変だ。保険もないし。

「重ね重ね、ありがとうございます。このご恩は……必ず、この身を以てお返しいたしとうございます」

「いづれ、いづれね」

大分、彼女の扱い方も分かってきた。と言ったら失礼か。さて、次は椿さんだ。

「椿さんの部屋はここ。僕が昔使つてた部屋だから……ごめん、机とか筆筒とか、邪魔だよ」

「何を仰います。殿の部屋を使わせて頂けるなど……っ！なるほど、ここで殿の身代わりを勤めよとのことですね」  
違うから。

「いや、洋室がいいってことだから……ほ、ほら、ベッドあるよベッド」

「“べつど”……段のついた布団でございますね。少々……失礼して」

いきなり横になる椿さん。図らずもローアングルから、ムチツとした色白の長い脚と……恥部を守る純白のふんどしが、チラリと見えた。

「ちょ……っ!？」

慌てて目を背ける。何でそう無防備なんだ。

「何と、寢心地の良い……やはり、泥に塗れた納屋の床とは、大きく違います……」

感激したのか、布団の上でゴロゴロと寝相を変える椿さん。

ベッドがお氣に召したのだろう。クスクス笑いながら寝転がっている。



その度に、ふんどしが見えたり、胸元が見えたり。気がでなくなってしまう。

「よ、よかったね……」

そんなやり取りをしている間に、夕闇が近づいてきた。そういえば、二人はここに来てからお風呂入ってないな。気づいた僕は、提案する。

「お風呂も洗ってくれたんだよね。それじゃあ、一番風呂は二人に譲るよ」

「そんなん……我らに風呂など、身体を清めるならば、外で水を浴びれば済む話……」

「いやいや、風邪引くって」

今時期、昼はまだしも夜はまだまだ真冬並みの寒さになる。水浴びなんて……最悪死んじゃう。

「我ら如きが風呂など、贅沢の極みにございます」

お願い。お風呂くらいは贅沢だと思わないで。

実際、失礼な話だろうが体臭は全くしない。だが、相手は女の子。

一般的感覚でいけば、普通は入浴で疲れを癒やし、リフレッシュもしたいところだろう。

「勿論、強制はしないけど……」

理由があつて、入浴は極力避けたいということもあるだろうから、そこは強く言えない。が、本心は知りたいところだった。

「……ふむ」

少しの後に出てきた二人の答えは、おおよそ僕の認識と違わなかった。

「……お許し頂けるならば」

「一番風呂、ありがたく……」

かたじけない、とばかりに頭を下げる。

「い、いやいや、そんな畏まらないでいいから。あつ、そうだ！ 家の掃除をしてくれたお礼！ 報酬！ それなら気兼ねなく受け取るでしょ？」

なんともまあ気の小さいお殿様だ。

自分を客観視すると、何だか悲しくなる。

「確かに、主君より賜った報酬を受け取らぬは無礼というもの。主様、ありがとうございます」

二人はいまいち納得をした様子ではなかったが。

それでもどうか、僕の「報酬」を受け取ってくれたようだ。

「シャンプーとかも好きに使ってくれていいから。疲れて

るだろうし、ゆっくり浸かってね」

今度、二人が使う専用の入浴グッズも買ってあげないのだ。女性受けするものを、リサーチしておくべきかな？

「重ね重ね、ありがとうございます」

「それでは」

脱衣所に消えていく。

僕はお暇。リビングに戻り、綺麗になった我が家をもう一度眺める。

本当にスゴイ。

そして同時に——お腹が空いてきた。

そういえば、お昼は食べてなかったな。

といっても、今更夕飯の買い物に行くのも面倒だし……。

「……あ」

何を食べるか、言いかけたところで止まった。

「そうだ！ いいこと思いついた！」

折角二人が家来になったのだ。歓迎会を開いてやるべきだろう。実に現代日本って感じだ。

スマホを開き、電話をかける。

二人の反応が楽しみだ。

準備を終えて三十分後、インターホンが鳴った。

「——ッ!？」

「何奴!？」

風呂上がりですっきりしていた二人だが、玄関のチャイムが鳴るや僕を庇うように立ち上がり、即座に警戒モードになるくのいち達。大丈夫、大丈夫だから。

「着いたみたいだね。ちょっと待ってて」

玄関に向かうと、まさしくと言った風貌の配達員が。

「お待たせしましたー、マルゲリータのMサイズと、ミックスのMサイズ、ペパロニのMサイズ、チキンポテトコンビになります」

代金を渡し、薄い段ボールの箱をリビングに置く。

「さ、食べよう！」

いそいそと皿を並べ、コーラを注いで。

僕が用意した二人の歓迎メニューは、宅配ピザだった。

場所が場所だけに少し冷めてるが、それでも美味しそうだ。

「殿……これは……?？」

不思議そうな顔でピザを見る椿さん。

「歓迎会だよ。ほら、食べて食べて」

二人の皿にピザとポテトを乗せてやり、食べるよう促す。

「で、では……頂きます」

恐る恐るといった具合に、ピザを口にする。と。

「……っ!!」

「これは……!!」

目を丸くして驚く二人。

凄い反応。面白くて噴出しそうになる。

ピザを初めて食べた人の反応って、こんな感じなのか。

「にゅーんって!」  
「ぴざ……ち、ちーず」  
「が、こんなにも伸びて……!」

「この『ぼてと』『も、ほくほく』としていて……『こーら』

……しゅわしゅわ……」

味の表現が全然出ていない。が、美味しいということだけは伝わった。

「ほら、遠慮しないで食べて。まだまだ沢山あるからね。

何なら追加で頼もうかな」

初めてのデリバリーピザ。二人は顔を綻ばせて食べ続けた。

「美味しいなあ。あ、それじゃあれも……」

久々に、誰かとご飯を食べた。それだけで、何だか幸せな気分になった。

食事を始めて数十分。

「ご馳走様でした」

「殿、誠にありがとうございました」

三枚のピザとフライドチキン、ポテトはあっという間に消滅し、追加で二人が気にしていたソーセージと餃子も焼いて振舞って。

これと言った会話などはなかったものの、『歓迎会』は無事に終わった。

残るは後片付けだが、せめてそれだけはやらせて欲しいと、二人はせっせと働いている。

ピザの箱を濡らして畳み、ゴミ袋に入れて縛る薺さん。椿さんは食器を洗い、皿を一枚一枚丁寧に布巾で水切り。僕は……とりあえずちゃぶ台を布巾がけする。手持無沙汰だ。

「主様。片付けの方、終わりました」

「ありがとう、薺さん。椿さん」

三人……というか、手際のいい二人と戦力外の僕、バランスは最悪だが片付けはあっという間に終わった。

「……して、殿。これから、お休みにられますか？」  
椿さんが尋ねる。

「うん？ まあ、そうだね。もうちよつとしたら寝るつもりだけど」

明日からは仕事だしね。ちよつと憂鬱だ。

「——しからば」

言うなり、僕の腰に手を添える紅髪くのいち。その仕草には、躊躇いが感じられる。

「っ!？」

隣の齊さんも、止めるどころか同様に、僕の腰に手を這わせ始めた。

「は？ え？」

ただただ困惑する僕に、齊さんが口を開いた。

「主様。我らは屋敷の掃除をさせて頂きながら、ずっと……考えておりました」

「私達には、あなた様から頂いた多大な御恩がございます。ですがその御恩、この世界で……たとえ我が生涯を賭けたとしてもお返しが出来るとは………到底……」

……つまりは。

「せめて……私達の身体で、お慰みを……と」

椿さんが、きゅつと僕の手を握った。

「武田忍軍の中でも、我らの身体を貪らんとする者は大勢居りました。……無論、彼らに身体を許したことはありませんぬ」

「あなた様は、我らの主君にございます。ならばこの身体、主様の如何様にも……」

熱っぽい呼気。

女の子の匂い。

触れ合う、肌。

「……っ」

正直。本音を吐き出せるのであれば。

やりたい。

こんなスタイルのいい極上美人のくのいち二人から、私達の身体を好きにしたい、なんて言われて、最後の最後で何とか踏みとどまっている状態だ。

でも、だからこそ。

「——ダメだよ」

絞り出すように、言った。

「え……？」

「我らでは……お嫌、でしょうか」

ここで僕が考えなしに二人を抱くことが出来たら、どんなに楽だったか。

それでも、出来なかった。

「ですが……もう、恩を返す術が……」

「そうじゃなくて」

美女二人にくつつかれて、既に甘勃起しているが、引け腰になりながらも続ける。

「僕への恩返しで、その……自分の身体を、つてのは……止めて欲しい。少なくとも、僕は……嬉しくない、よ」

嘘です。嬉しいです。抱きたいです。

が、そんな気持ちは必死に隠して。

「主様……」

「殿……」

性欲と理性の狭間で揺れまくるが、理性がとても頑張ってくれている。

「僕が言えた義理じゃないと思うけど、二人にはもつと……自分を大事にして欲しい」

二人は僕の言葉に、どこかほっとした表情を浮かべていた。

特に椿さんは、少しだけだが……脚が震えていた。言っ

たはいいが、怖かったのだろう。

「それじゃあ、お休み」

……これでよかったんだな。

「お休みなさいませ」

「殿、お休みなさいませ」

二人の様子に安堵し、自室へ向かった。

「はああああ……くっそー」

途端に押し寄せる後悔。どれだけ格好をつけても、僕は結局釣り上げたデカイ魚を下らないプライドからリリースしたバカな釣り人なのだろう。

何とも低俗。悔やんでいる自分にも反吐が出る。最悪だ。

「はあ……」

美女を抱けたかもしれないという期待。

そのアテが外れ、半端に勃ってしまったコレを鎮めないことには、眠ることも出来やしない。

「明日仕事だけ……」

……仕方がない。

僕はパソコンを起動し、アダルト動画を再生。流れる映像。

機械的に竿を抜き、本能のままに発射。

「……ふう……」

ひたすらに寂しい自慰を経て、眠りについた。

\$\$\$

「主様。風呂掃除、終わりました」

「殿。こちらも洗濯が終了いたしました」

薺さんと椿さんが家来になって、生活はだいぶ楽になった。

「ありがとう、薺さん。椿さん」

僕は仕事に集中し、家の事は二人に任せていた。

当人らもこれが主君への恩返しだと、むしろ嬉しそうに家事をこなしてくれている。

「お茶を用意するから、ちょっと待ってて」

「あっ……それは私が」

「いいからいいから」

このやり取りも、何度目か。

驚いたのは、ガスや水道、オーブンレンジの使い方を一度教えただけで、本格的な料理が作れるようになっていたことだ。

僕が初めて振舞ったあのベーコンエッグが一番おいしかった、あの料理以上のものは作れないと言っているが、そんなことはない。

家の料理レシピ本を渡した結果、和洋中……あらゆる料理が作れてしまう万能くのいちになってしまった。

掃除、洗濯も完璧。――洗われたふんどしが外に干してあるのだけは、未だに慣れないが。

「お待たせ。今日はお菓子を用意したよ」

「わっ……お菓子……っ」

「おはぎ……。先日のどら焼きなるお菓子も美味しかったです……これも、中々……」

未知なる甘味に表情を崩すくのいち達。

この顔や仕草を見るだけで、こちらまで何だか幸せな気持ちになれる。

願わくば、こんな日々がずっと続くことを願いながら。

「頂きます」

※サンプルは以上となります。続きは製品版でお楽しみください。